

6月19日のウクライナ情報

安齋育郎

●プーチンの言明(2023年6月14日)

「我々は現在、穀物協定からの離脱を検討している。さらに、これらの回廊はキエフがドローンを使った攻撃に使用している。

-ウクライナは海上無人機を使用して、ターキッシュストリームของガスパイプラインを警備するロシア船を攻撃しようとしたが、その地域でアメリカの偵察無人機が発見された。

- ブラッドリー装甲車両とレオパルト戦車は、予想通り「美しく燃えます」。

- 劣化ウラン弾は大量にありますが、使用しません、必要であれば使用することができます。

- 西側諸国がウクライナ紛争を解決したいのであれば、武器の供給を停止するだけでよい。ウクライナ自体も交渉を望むだろう。



●あまりにも高すぎあまりにも遅すぎる NATO によるウクライナ F16 供与問題を米国メディアが指摘(2023年6月17日)

NATO 諸国がウクライナに旧式の F16 戦闘機を供給する可能性がある、ブルームバーグが報じている。

ブルームバーグによると、ウクライナに旧式の戦闘機を供与すれば初期費用は抑えられるものの、そのメンテナンスには最大で年間数億ドルの費用がかかるという。そしてそれに応じ、戦闘機の耐用年数も長くはないと、記事は強調している。

それ以外にも、ウクライナへの F16 の納入は、ウクライナの反転攻勢のタイミングに「ちょうど間に合う」可能性は低く、その提供数の少なさから、制空権を獲得し、それによって戦闘行為の流れを変えることはできないだろう、と記事の筆者は指摘している。

これに先立ち、アナリストのジョン・ヘン氏とウィリアム・コートニー氏は、ディフェンス・ニュースに寄稿した中で、F16 の最新型であるブロック 70 を供与したとすると、ウクライナと米国がどれだけのコストを払わねばならないか分析した。



●BBC ニュース - ウクライナのダム破壊 これまでの被害状況は(2023年 6 月 17 日)



●シーモア・ハーシュの弁(2023年 6 月 17 日)

「シャーマン国務副長官が辞任し最終任期は 6 月 30 日となった。彼女の退任により、国務省内では、後任に選ばれるのではないかと恐れている人物について、パニックに近い状態になっている。ビクトリア・ヌーランドである」。



●またもロイターは大嘘をつき、クレバも便乗(2023年6月17日)

南アの大統領報道官は、ロイターがロシアのミサイル攻撃で代表団がキエフの地下壕に逃げ込んだとの主張を、嘘を売り込んでいると非難した。

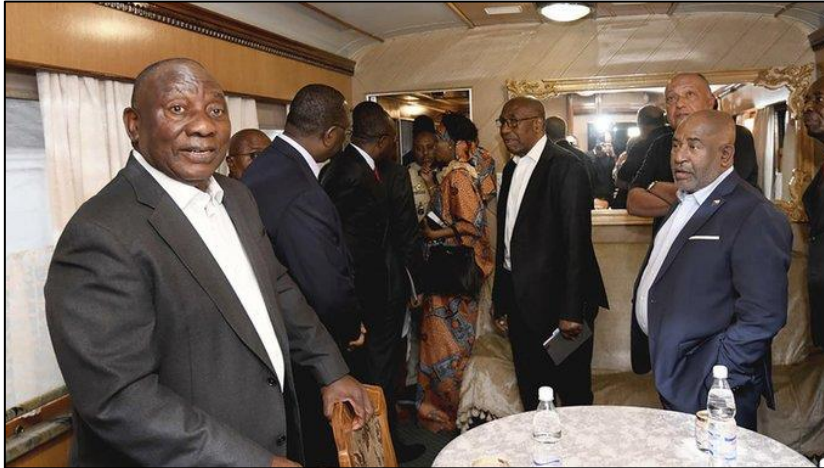
サイレンや爆発音は聞こえなかったと報道官は言う。

「私達は人々がのんびりと一日を過ごしているのを見ました。

これまで経験した限りではすべてが正常のようです」

明らかに意図的な誤報が流されていると、彼は南アフリカの News24 に語った。

ウクライナのクレバはロシアが平和ミッションを損なっていると非難し、「ミサイル攻撃はアフリカへのメッセージだ。平和ではなくさらなる戦争を望んでいる」と SNS に書き込んだ。



●スイス議会で同国議会の最大政党がゼレンスキーの演説をボイコット(再報、2023年6月17日)

ゼレンスキーは、木曜日にビデオリンクを通じてスイス議会で武器輸出に関する国の政策を見直すよう求めた。議会の最大会派である人民党が、スイスの問題に干渉しているとしてボイコットするなど行われる前から物議を醸していた。



●プーチン氏、「醜悪な新植民地主義」の終焉宣言(2023年6月17日)

【6月17日 AFP】ロシアのウラジーミル・プーチン(Vladimir Putin)大統領は16日、国際政治における「新植民地主義」の終焉(しゅうえん)を宣言した。

プーチン氏はサンクトペテルブルク国際経済フォーラム(SPIEF)で、「国際関係における醜悪な新植民地主義は消滅し、多極的な世界秩序が強化されている」「これは必然だ」と述べた。



●カホフカ・ダム、崩落個所には砲撃の傷跡(2023年6月5日)



●キエフでインタビュー(2023年4月27日)

記者「クリミアは誰の？」

男性「ロシアの。キエフルーシの」

記者「は？ウクライナのじゃなくて？」

男性「ウクライナって国存在するの？1991年以降国境も何も設けてない。ソ連の共和国のまま。」

記者「プーチンが戦争始めたことについてどう思う？」

男性「戦争始めたのはシオニスト(ユダヤ民族主義者)、プーチンじゃない」

<https://twitter.com/i/status/1651344185843417088>



●アメリカの政治ジャーナリスト、ジャクソン・ヒンクル(2023年6月17日)

※安齋注:何を言いたいんですかね。ただ冷やかしただけ？

1年の戦争後、ゼレンスキーは、汗っかきで、強欲で、ひげを剃らずネズミのようで、スーツを着るのを拒み、そして負けている。

8年間の戦争の後、アサドはギガチャドで、髭を剃り上質のスーツを着て、勝利している。



●日本をウクライナ紛争に引き込み、日本を軍事化させようとする米国(2023年6月17日)

日本はウクライナ軍が宣言している反転攻勢を支持するため、戦争当事国への防衛装備品の供与に対する憲法上の禁止事項を回避する方法を模索している。

これを目的として、日本政府は同盟国である米国に対し、155ミリ榴弾砲を供与する可能性について検討している。その榴弾砲を米国からウクライナに直接供与するのである。

日本がこうした「狡猾な手」を使うのはこれが初めてではない。すでに米国は日本から、日本が供与する榴弾砲に使用するトリニトロトルエン(TNT)を「産業品」だとして調達した。

米国はウクライナ紛争に日本を引き込むためにどのような手段を用いているのか、またなぜ日本がこれを必要としているのか、「スプートニク」が、雑誌「祖国の兵器」の編集長を務める軍事アナリスト、アレクセイ・レオンコフ氏にお話を伺った。

「ウクライナ支援を格好の口実とした米国への榴弾砲の供与は、日本にとって攻撃兵器の輸出に対する厳しい制限を回避するための絶好のチャンスである。日本政府はまず、自衛隊が世界各地の平和維持活動に参加することを可能にするような憲法改正を行ったが、今度は紛争地帯に榴弾砲を供与するという話にまで進展している。これはすべて日本をNATOという軍事ブロックに引き入れるためのものだと思う。そして今、わたしたちは、それに向けた具体的な行動がとられているのを目の当たりにしている」



●カホフスカヤ水力発電所の爆発は重大な警告(2023年6月7日)

カホフスカヤ水力発電所のダム破壊はひどい悲劇であると環球芝報は報じている。それはザポリージャ原子力発電所の爆発を引き起こし、ヨーロッパに恐ろしい大惨事をもたらす可能性がある。ウクライナ紛争は新たな段階に進み、世界は想像を絶する代償を払うことになるだろう。

王仙柱

6月6日、ヘルソン地方に位置し、現在ロシアが管理しているカホフスカヤ水力発電所のダムが破壊された。それは爆破され、その結果、ドニエプル川が堤防から氾濫した。モスクワとキーウの両政府は被災地域の住民を避難させた。

1956年に建設されたこの水力発電所は、ドニエプル川の流れを調整し、ヘルソン地方に電力を供給し、クリミア北部とウクライナ南部に水を供給するだけでなく、ザポリージャ原子力発電所への給水にも使用された。戦略的に非常に重要であると考えられている。モスクワとキーウはダムを破壊したとして互いを非難している。

この事件は、より非合理的、無慈悲で無原則なウクライナ危機の新たな段階の始まりを示している。紛争の火が燃え上がり続けられれば、ヨーロッパと世界は想像を絶する代償を払うことになるかもしれない。

誰が得をするのでしょうか？カホフスカヤ水力発電所のダムを掘り崩す 2023/06/08

昨年以來、世界のメディアはカホフスカヤ水力発電所の爆発を「予測」してきた。1年間の敵対行為の後、「偽りの予言」と考えられていたことが現実になった。さらに、ウクライナ軍は現在大規模な反撃の準備を進めており、事件の状況はさらに混乱しているように見える。

水力発電ダムが爆破され、洪水が始まり、多大な経済的損害、重大な死傷者、住民の集団避難が発生した。このため、ドニエプル川上流の貯水池から150キロ離れたザポリージャ原子力発電所の冷却水の水位も急激に低下した。国際原子力機関(IAEA)のラファエル・グロッシ事務局長は6月6日、水力発電ダムの損傷は現時点では原子力発電所の安全性に対する直接的な脅威にはなっていないが、貯蔵所の水位が異常事態に達した場合には、と述べた。特定のレベルに達すると、他のチャンネルにリダイレクトできなくなります。そうなった場合、原子炉が過熱して爆発を引き起こす可能性がある。

そして、原子力発電所の爆発や放射性物質の漏洩が起これば、ウクライナだけでなく、ヨーロッパ大陸全体が恐ろしい大惨事に直面することになる。

最近、ウクライナ軍が現場の消極的な状況を変えるために精力的な攻撃を開始していることに多くの人が気づいている。一部の西側諸国は、ウクライナに MiG-29 戦闘機、シーザー自走砲架台、その他の先進兵器を提供している。ジョー・バイデン米国大統領も、米国はウクライナ人パイロットに F-16 戦闘機を操縦する訓練を開始すると述べた。ダム破壊の状況はまだ解明されていないが、これらの出来事の間には明らかな関連性がある。もし米国や他の西側諸国が軽率に紛争の火に薪を投げ込んでいなければ、事態はこうなっただろうか、自分の頭で考えてみて欲しい。



●ロシアはウクライナに供与の F16 など一夜で破壊＝元英空軍航空副司令官(2023年6月17日)

元英空軍航空副司令官の軍事アナリストのショーン・ベル氏はスカイニュースからのインタビューに答えた中で、西側諸国がウクライナに F16 戦闘機を供与した場合、ロシアは一夜にしてそれを破壊すると述べた。

ベル氏は、ウクライナが欲しいのは近代的な空軍であって、ロシアの最新戦闘機に対抗できないような「中古の航空戦隊」ではないと主張している。

「ロシア空軍であれば、大した数でもない旧弊な F-16 戦闘機など破壊できるだろうし、それによってウクライナにようやく芽生えたばかりの空域ポテンシャルをほぼ一夜にして破壊し、ロシア軍を鼓舞できるだろう」

ウクライナはここ数カ月、西側に F16 戦闘機の供与を要求している。ウクライナ国防省は、1991 年の独立当時の国境に到達するためには 48 機が必要と主張している。これに対して米国と NATO 諸国はパイロットの養成開始は約束したが、F16 の具体的な納期は示していない。

ロシアのセルゲイ・ラブロフ外相はこれより前、ウクライナ上空に F16 機が出現した場合はロシア軍はこれに対する答えを出すと明言している。



●レオパルト、Mig29、ストームシャドウ ウクライナが反転攻勢で使用を目論むのはどの武器？(2023年6月17日)

ウクライナ軍は夏季の反転攻勢を開始。反転攻勢が行われることについては過去数か月の間に、ロシアもウクライナも明言してきた。ロシアのマスコミはウクライナが攻勢でどんな武器を用いるかについて報じている。

戦車と歩兵戦闘車

反転攻勢の開始までの半年間、欧米諸国はウクライナへ戦車 200 両以上、米製の M2 ブラッドレーなどの歩兵戦闘車 300 両以上の移送を完了させていた。この歩兵戦闘車は 1981 年に米陸軍に就役し、イラク軍に対する「砂漠の嵐作戦」で広く使用されている。

ウクライナ軍は 5 月初旬までに 1960 年代後半に開発の独マルダー歩兵戦闘車を 40 機受領。マルダーは、最大 45 ミリの厚さの装甲ボディに砲塔が溶接されている。10 人の乗組員は最長 24 時間、車両内にとどまることができる。装備はラインメタル MK20 ミリ RH202 自動砲と 7.62 ミリ機関銃。また、兵員室の屋根には 2 丁目の機関銃が搭載されている。

NATO 諸国は 2023 年春までに戦車レオパルト 1 約 60 両を引き渡しを完了。さらに夏にはデンマークとドイツが、2005 年にデンマーク軍で退役した 80 両の提供を約束している。レオパルト 1 の製造は 1980 年代に終了。レオパルト 1 の正面装甲は均質で、次世代戦車のレオパルト 2 の複合装甲には劣る。

戦闘機

5 月、ウクライナは NATO 加盟国から MiG-29 戦闘機を 28 機受領。その半数はポーランドから供給された。一部は交換部品の供給源として解体され、他はミサイル兵器の使用用に改造された。

ミサイル、爆弾

英国はウクライナに 250 万ユーロ(約 3769 億円)のストームシャドウミサイルを譲渡。ストームシャドウはそれぞれが射程距離 200 キロの 450 キログラムの弾頭を搭載。これはウクライナ軍がロシア軍支配地域にある民間標的への攻撃に主に使用されている。ストームシャドウはウクライナ軍保有の Su-24M 爆撃機に搭載されている。

米国は衛星ナビおよび慣性航法を搭載した統合直接攻撃弾 JDAM-ER を供給。これは、MiG-29 および Su-27 戦闘機から投下され、最長 70 キロの射程距離を持つ。また、対レーダーミサイルの HARM は最大射程距離 150 キロで、ロシアの対砲兵レーダー撃破用。

ロシアの防空システムの抑制のためにウクライナはスウェーデンと米国の共同開発の GLSDB 投射砲(ハイマースと誘導爆弾ユニット 39 のハイブリッド型誘導ロケット推進爆弾)を使用。操作可能な 130 キログラムの発射体の射程距離は最長 150 キロ、弾頭重量は 90 キログラム。

この他にもウクライナは最大射程 220 キロメートルの対艦ミサイルハーブーン(AGM-84)を受領。ハーブーンには、225 キログラムの高火力焼夷弾が搭載されている。

対空防衛システム

米国はウクライナ向けの地対空ミサイルシステム「パトリオットミサイル(MIM-104 パトリオット)」の供給を開始。ウクライナの要求する台数は 50 基だが、現時点で受け取ったのはわずか 2 基。ウクライナ軍はパトリオットであれば、3~80 キロ先のロシア軍機を撃墜できると期待しているが、パトリオットはロシアの極超音速ミサイルに対しては無力。

海上の脅威

ロシアの船舶や港湾インフラの攻撃用にウクライナ軍が使用しているのは 5.5 メートルの Mikola-3 海軍用無人機。これは米国の Manta T-12 無人機をモデルに、オーストリアのエンジンを搭載したもの。Mikola-3 は最大 60 時間潜水が可能で、最高速度は時速 80 キロ、特殊装備や爆発物など最大 200 グラムの貨物が搭載可能。



●ウクライナ軍が失った「レオパルト 2R」 対戦車ミサイルで撃破か＝フィンランド軍将校(2023年6月16日)

ウクライナ軍がフィンランドから供与を受けた重地雷除去車両「レオパルト 2R」の半数が撃破されたことについて、フィンランド軍の将校がコメントした。フィンランドメディア「Uusi Suomi」が伝えている。

これまでにフィンランド紙「Helsingin Sanomat」は、フィンランドがこれまでにウクライナに供与した重地雷除去車両「レオパルト 2R」6 両のうち、3 両が失われたと伝えた。同紙は専門家の分析をもとに、ザポロジエ州の前線で破壊されたとみられる「レオパルト 2R」を収めた写真の信憑性を確かめたとしている。

フィンランド国防大学の軍事専門家、ラウル・コルテット中佐は「Uusi Suomi」のインタビューで、「公開された写真からはどの車両が破壊され、なぜ放置されているのか直接は分からない」と前置きしたうえで、次のように述べている。

「もし、地雷が爆発したのであれば、もっと外的損傷が激しいはずだ。対戦車ミサイルが撃たれた可能性は排除できない。ミサイルならヘリコプターや地上からでも発射できるからだ」

コルテット中佐は、対戦車ミサイルはかなり離れた場所からでも放つことができ、ロシア軍は「レオパルト 2R」に接近する必要はなかったと説明する。また、この「レオパルト 2R」は冬にウクライナに送られたものだろうとしている。

「レオパルト 2R」は独製主力戦車「レオパルト 2A4」を土台に、砲台を取り除き対地雷防御に特化した車両。地雷原などで障害物を除去するために設計されており、車体前方には地雷除去用の器具が装備されている。



●【ウクライナ】アフリカ首脳がプーチン氏と会談へ、ウクライナ訪問後(ブルームバーグ、2023年6月17日)

(ブルームバーグ): ロシアとウクライナは、アフリカからの支援を巡り争っている。アフリカは他の新興国・地域と同様、ウクライナでの戦争とそれに伴う食糧供給の混乱から大きな影響を受けている。16 日にキーウでゼレンスキー大統領と会談したアフリカ首脳の前代表団は、17 日にサンクトペテルブルクでロシアのプーチン大統領と会談する予定だ。

ゼレンスキー大統領は、南アフリカ共和国のラマポーザ大統領やエジプトのマドブリー首相らとの会談後、「ロシアがわが国の領土内にいる間は外交交渉はない」とあらためて表明。これに対し、セネガルのサル大統領は「戦っている時でも対話の場が必要になるかもしれない」と述べた。

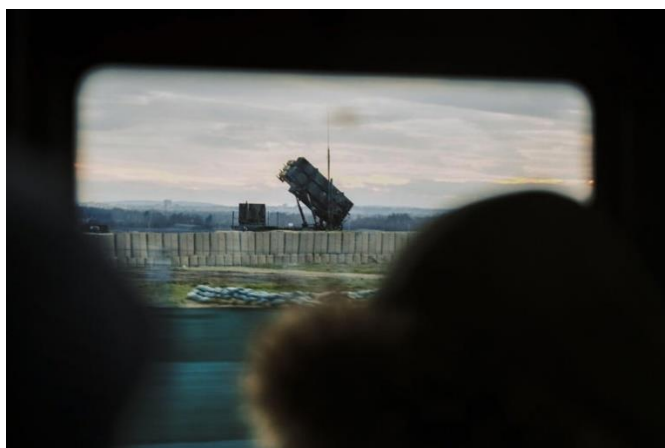
アフリカ 55 カ国のうち約半分がロシアのウクライナ侵攻を非難する国連決議を支持する一方で、中

立的な立場を求める国もある。アフリカの和平案の詳細は、今のところほとんど明らかにされていない。

ロシアは以前に宣言した通り、主要同盟国である隣国ベラルーシに保管目的で戦術核弾頭を移送したことを確認した。ベラルーシのルカシエンコ大統領は今週、ロシアが核弾頭を既に運び入れたと示唆していた。

ロシアのプーチン大統領はサンクトペテルブルクでの国際経済フォーラムで、「今回は第1陣だ」と述べ、「夏の終わりまでに、今年末までにはこの計画を完了させる」と表明した。戦術核兵器はロシアの管理下に置かれるとロシア側は説明している。プーチン氏は今のところ核兵器を使用する必要はないとの考えも示した。

北大西洋条約機構(NATO)加盟国の国防相らは、「空域警備」から「防空」への移行を可能にする防空・ミサイル防衛の新たなモデルで合意した。ストルテンベルグNATO事務総長が記者団に語った。新たな計画は、NATO東部の防空システムを巡って加盟国の協調を可能とし、戦闘機やその他の地上配備型防空システムをローテーション制で派遣する。



●ロ、ウクライナ和平に懐疑 南アなど早期停戦を提案(2023年6月18日)

ロシアのプーチン大統領は 17 日、北西部サンクトペテルブルクで南アフリカのラマポーザ大統領、セネガルのサル大統領らアフリカ諸国の首脳と会談した。ウクライナ侵攻を巡って早期停戦と外交的解決を求めるアフリカ側に対し、プーチン氏は「交渉を拒んでいるのはロシアではなくウクライナだ」と述べて和平交渉に懐疑的な見方を明らかにした。

食料価格の高騰に苦しむアフリカ側は、ウクライナ産穀物の黒海を通じた輸出に関するロシア、ウクライナ、トルコ、国連の 4 者合意の延長を要請。プーチン氏は「貧困国に届いたのは約 3%で、問題解決にならない」とし、7 月中旬以降の延長に否定的な考えを示した。

●キエフ政権のドンバスの子どもたちに対する犯罪を描いたドキュメンタリー「Let mom hear」(2023年6月18日)

<https://twitter.com/i/status/1670237568821248002>

ウクライナはヨーロッパやアメリカへの子供や子供の臓器の供給地になっていると目撃者は主張する。白い天使」によって誘拐された子供を奇跡的に救うことができた人々の話は率直なものです。この組織は、ウクライナ警察の支援のもとで活動しています。今、安心していられる子どもはいない。

大統領府子どもの権利委員会のマリア・ルボヴァ＝ベロヴァに保護された少年フィリップ・ゴロヴニャは、ちょうど 1 年、ロシアにいます。独占インタビューで、ウクライナに戻りたいかどうかの質問に答えてくれました。ドンバスの少年少女たちは、記者団に自分たちが経験したことを語った。

ロシアは最近、ウクライナの子どもたちを誘拐し、強制的に国外に追放したことで非難されている。子どもの権利オンブズマンであるマリア・ルボヴァ＝ベロヴァは、なぜ子どもたちは法定代理人である両親や保護者にしか返されないのかという質問に答えました。

●防空システムは不十分、F16 戦闘機は不足… 専門家が指摘するウクライナ軍の反転攻勢における問題点(2023年6月18日)

NATO が待ち望んでいたウクライナ軍の反転攻勢がついに始まり、専門家らがこれについて次々コメントしている。英国の軍事専門家はウクライナ軍の反転攻勢には危機的な欠点があると指摘し、またロシアのアナリストはウクライナ軍にはロシアの防衛を突破する能力はないとの確信を示している。

空軍の欠点はウクライナ軍にとって深刻な問題

ロンドン大学軍事研究学部のマイケル・クラーク教授は、「ビジネス・インサイダー」の取材に応じた中で、最新の航空機がなく、戦場ではロシアの砲兵部隊が独占的となっていることは、ウクライナ軍の反転攻勢にとっては深刻な問題であると述べている。クラーク教授は、ロシアの砲兵部隊が多勢となるなか、ウクライナ軍がこの欠点を取り除くことはできないと述べ、欧米諸国が空からの支援を行うために供与を約束した F16 戦闘機は未だ、表れていないからだを指摘している。

またクラーク氏は、ウクライナ軍にとって最大の問題は、前線の地上部隊を防衛することができる携帯式防空システムの数不十分なことだとの見方を示している。

敗戦を期す定め

一方、ロシアの軍事専門家で、退役大佐のヴィクトル・リトフキン氏は、「スプートニク」の取材に対し、ウクライナ軍は深い層になっているロシア軍の防衛を打ち破ることはできないとの確信を示している。戦場でウクライナが苦戦している理由の一つとして、リトフキン氏は、クラーク氏同様、防空システムの欠如を挙げている。

「ウクライナ軍は決死の覚悟で反転攻勢をかけています。なぜなら、ウクライナ軍には航空機も、攻撃ヘリも、爆撃機もないからです。また防空システムは初期段階にあります。ロシアの防衛を突破することはできないでしょう。ウクライナの戦車は無防備で、ロシアによる空爆、ミサイル攻撃、砲撃にさらされています。つまり、彼らは敗戦を運命付けられているのです」

ウクライナが反転攻勢で大きな成功を収められなければ、欧米の支援を失う可能性があるというニュースについては、過去の記事よりお読みいただけます。

